

機関番号：17102

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19320098

研究課題名（和文） 前近代東アジアにおける文書とその伝来に関する比較的研究

研究課題名（英文） A Comparative Study of the Documents in East Asia before Modern Age

研究代表者

坂上 康俊（SAKAUE YASUTOSHI）

九州大学大学院・人文科学研究院・教授

研究者番号：30162275

研究成果の概要（和文）：

公文書の様式の面では、前近代の日本と韓国の両国において、中国、特に唐代の文書様式が継受されていたことを具体的に明らかにし、一方でそれ以後の、特に元の文書様式の特異性を浮かび上がらせた。

ついで公私文書の伝来の面においては、文書そのものに期待された機能に三国簡の違いがあったというわけではなく、やはり中国の1949年の土地改革や、韓国における朝鮮戦争の戦乱に、伝存状況の違いの大きな原因を帰すべきであるという結論になった。ただし、韓国においては、身分が文書の伝存を否定する、具体的には商家の経営文書を、商人身分からの上昇を契機に廃棄するという現象の存在が指摘され、身分制と文書の伝存との連関という新たな研究視角を得ることが出来た。

研究成果の概要（英文）：

In pre-modern Japan and Korea, the Chinese formats of official documents were accepted. Especially the formats of documents in Tang China were followed by East Asian dynasties. The functions of official or private documents were common throughout the East Asian world but recently revolutions and wars have often disturbed the succession of the documents in China and Korea.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2008年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
2009年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2010年度	2,300,000	690,000	2,990,000
年度			
総計	13,000,000	3,900,000	16,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：文書、東アジア、比較史

1. 研究開始当初の背景

日本の古文書学は、西欧の古文書学の大きな影響の元に発展してきた。特に形態論・様式論・機能論といった古文書学の発展過程は、それぞれ西欧においても同様の問題意識に支えられて展開してきたものであり、結果的

に、日本古文書学の主たるフィールドであった日本中世史研究の世界の中で、封建制・主従制・知行制・領主制などあまたの概念が、日本中世社会と西欧のそれとの類比を指し示してきた歴史がある。

しかし、そもそも日本の文書の様式は中国

のそれを継受することから始まっている。とすれば、いずれかの時点において、何らかの背景のもとに、中国的な文書の世界から、西欧と似た文書の世界へと転換したと考えざるを得ない。もしくは、これまでの日本の古文書学そのものの中に、西欧古文書との類似性を見いだそうとする指向性が浸透しつづけ、敢えて非東アジア的な論点ばかりが強調されてきた可能性もある。

研究史の展開に対して上記のような懐疑の念がぬぐえない以上、中国や韓国などの諸国における文書の世界と、前近代日本のそれとの共通性や異質性を、あらためて検討する必要があると考えた。

2. 研究の目的

前近代東アジア世界における文書の形態・様式の系譜論的な検討に加えて、保管・利用を含む機能を契機とする伝来の側面をも十分に検討し、もって東アジア世界に展開した諸国家・諸社会の秩序維持システムの比較検討に資することを目的とした。

3. 研究の方法

前近代東アジアの諸国、特に中国・朝鮮・日本における文書の様式の系譜的研究及び残存の様態の比較的研究の基礎を形作るべく、(1) 各国の最新の研究成果を採り入れつつ、それぞれの古文書研究の流れを整理し、また(2) 各国の第一線の古文書研究者の討議を通じて、様式の系譜及び伝来状況の相違の背景を探る。

4. 研究成果

(1) 研究期間内の4か年にわたり、国内のみならず中国社会科学院・韓国学中央研究院・韓国国史編纂委員会等の第一線の文書研究者を招聘し、シンポジウムやワークショップを開催し、また九州大学の学内で開催する定例の研究会において、諸国の古文書の様式・機能・伝来状況についての個別具体的検討を行うとともに、下記のシンポジウムやワークショップの予備報告を行った。

まず初年度には、国際シンポジウム「文書から見た東アジアの戦争と外交—モンゴル・元を中心に—」を開催し、船田善之「日本宛外交文書からみたモンゴルの文書様式の展開」、森平雅彦「交戦期における高麗とモンゴルの往復文書をめぐって」、佐伯弘次「日本中世の外交文書と「返牒」」、四日市康博「ユーラシアの東と西におけるモンゴル文書様式の影響」、青格力「モンゴル帝国の外交文書」の報告を得ることが出来た。このシンポジウムでは、特に印章の側面からのモンゴルの文書様式の諸国への影響関係と、モンゴルの文書に特徴的な「威嚇文言」が授与者側と受け手側とで解釈を著しく異にする状

況とが明らかにされた。

二年目には国際ワークショップ「前近代東アジア文書の比較的研究—王言とその施行文書を中心に—」を開催し、党宝海「蒙元時代的双語公文初探」、小林隆道「宋元交替期の宋代文書—蘇州玄妙觀「天慶觀甲乙部符公批」所刻宋元公文書の検討—」、金子修一「唐以前の「皇帝敬問」「皇帝問」文書の諸問題」、全昊穆「朝鮮時代韓国と明清時代中国の土地売買文書の比較」、崔鉉植「韓国古中世古文書研究の現況と課題—『韓国古代中世古文書研究』の研究過程と成果を中心に—」、佐伯弘次「日本古代・中世の下達文書様式概観」を得ることが出来、西欧中世史の岡崎敦よりコメントがあった。これらの報告は予稿集にまとめられている。

三年目には国際ワークショップ「前近代東アジア公文書の比較的研究—文書のかたち—」を開催し、李鎔賢「韓国出土木簡のかたち」、沈泳煥「高麗時代の中書門下教牒の可能性」(森平雅彦代読)、劉曉「元代道教公文書初探—「承天觀公批」と「靈応觀甲乙住持札付碑」を中心に—」、橋本雄「勘合のかたち—清代勘合と日明勘合を例として—」、岩崎義則「倭館「館守日記」の伝来と関連史料について」、金玟廷「朝鮮側から読み直す『館守日記』宝永7年2月10日条—辛卯約条の再考—」の報告を得た。

この両年度のワークショップでは、木簡や勘合符のような現物からの情報の引き出し方など、日本の古文書学の方法論が、中国・韓国においても同様に有効であることが示され、また文書様式名の比定を基礎とした高麗における唐公式令文書様式の継受の状況が紹介されたことにより、中国の文書様式が韓国に絶えず大きく影響を与えていることが具体的に明らかにされた。

ただし、ここまでの三年間のワークショップでは、本研究の一つの柱である伝来論への関心が薄かったので、最終年度である四年目には、「前近代東アジア公文書の比較的研究—文書の伝来—」と題する国際ワークショップを開催することになった。報告としては、劉迎勝「《元典章・吏部・官制・資品》考」、伊藤幸司「朝鮮国の外交文書原本とその特徴」、郭万平「宋代官文書の廃棄及其流向—以現存宋代公文紙印本、抄本を中心—」(中島楽章代読)、金東哲「朝鮮後期釜山倭館の東萊商人関係文書について」、安承俊「韓国古文書の知識情報化の現況と課題—平準化方案およびwebサービスを中心に—」を得ることが出来た。

このワークショップの場では、予想通り、それぞれの国による文書の残存のあり方の違いに関心が集まったが、特に中・韓においては、近代化の過程で失われたものが多いこと

が確認された。中国においては文革よりむしろ49年以降の土地改革の過程での地主文書の処分が影響が大きい。一方韓国では、北部にあっては朝鮮戦争の際の損害が大きく（研究会例会における孫承喆江原大学校教授の報告）、一方釜山地域にあっては、身分、特に商人身分からの脱出の意味で自ら経営関係の文書を処分したということが語られた（研究会例会における李美蘭釜慶大学校大学院生の報告及び上記金東哲教授の報告）。これらの事例と対比させれば、日本の文書の伝存には身分関係が絡むことはこれまで殆ど問題にされたことがないことが注目され、今後の研究の萌芽が得られたと評価できる。

(2) こうした国際ワークショップや研究会の例会活動のほか、前近代東アジア諸国において作成・授受された文書に関するこれまでの研究を網羅した文献目録を、地域・時代を分けて作成した。

こういった文献目録は選択の基準が曖昧になりやすく、また絶えずメンテナンスしていかねばならないという問題もあろうが、とりあえず収集した文献については、あまりにも膨大な量になったため、予定していた紙媒体を用いずに、下記のホーム・ページ上で公開している。

(3) 紙の文書のみならず、宋・元時代の石碑等の金石文についても現地調査を実施し、さらに日本古代・中国晋代・韓国百済・新羅出土木簡については、釈読や再解釈等の研究を進めた。これらの成果の一部は、国内外における学会での口頭報告や論文等の形で公表されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 69 件)

- ① 船田善之「モンゴル語直訳体の漢語への影響」『歴史学研究』(査読有) 875 号、2011 年、pp. 1-12
- ② 坂上康俊“The Comparative Study of the Ritsuryo Bureaucracy in Ancient Japan and Tang China” *ACTA ASIATICA* (査読無) 9 9、2010 年、pp. 19-38
- ③ 船田善之「元代漢文公文書の現状及其研究文献」『西夏学』(査読有) 4 号、2009 年、pp. 84-89
- ④ 中島楽章「元代の文書行政におけるパスパ字使用規定について」『東方学報』(査読有) 84 冊、2009 年、pp. 91-138

[学会発表] (計 62 件)

- ① 伊藤幸司 The Muromachi Shoguns' Use of Zen Monks for Diplomacy, Association for Asian Studies, 2011 年 3 月 31 日、ホノルル、
- ② 岩崎義則「平戸藩主松浦静山の書物収集と情報交流」九州史学会大会、2010 年 12 月 11 日、福岡・九州大学
- ③ 四日市康博「ユーラシア交易圏からアジア間交易圏へ」第 54 回国際東方学会議、2009 年 5 月 15 日、東京・日本教育会館
- ④ 森平雅彦「交戦期における高麗とモンゴルの往復文書をめぐって」九州史学会大会、2007 年 12 月 8 日、福岡・九州大学

[図書] (計 7 件)

- ① 坂上康俊『平城京の時代』岩波新書、2011 年、262 頁
- ② 佐伯弘次『朝鮮中期韓日関係と博多・対馬(ハングル)』景仁文化社、2010 年、357 頁
- ③ 中島楽章『明代郷村糾紛と秩序：以徽州文書を中心』江蘇人民出版社、2010 年、308 頁
- ④ 中島楽章『徽州商人と明清中国』山川出版社、2009 年、90 頁

[その他]

ホームページ等

http://www.lit.kyushu-u.ac.jp/his_jap/premodernpaleography/

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂上 康俊 (SAKAUE YASUTOSHI)
九州大学・大学院人文科学研究院・教授
研究者番号：30162275

(2) 研究分担者

佐伯 弘次 (SAEKI KOJI)
九州大学・大学院人文科学研究院・教授
研究者番号：70167419

岩崎 義則 (IWASAKI YOSHINORI)
九州大学・大学院人文科学研究院・准教授
研究者番号：60294849

濱田 耕策 (HAMADA KOUSAKU)
九州大学・大学院人文科学研究院・教授
研究者番号：40137881

森平 雅彦 (MORIHIRA MASAHIKO)
九州大学・大学院人文科学研究院・准教授
研究者番号：50345245

川本 芳昭 (KAWAMOTO YOSHIKI)
九州大学・大学院人文科学研究院・教授
研究者番号：20136401

中島 楽章 (NAKAJIMA YOSHIKI)
九州大学・大学院人文科学研究院・准教授
研究者番号：10332850

伊藤 幸司 (ITO KOJI)
山口県立大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：30364128

舩田 善之 (FUNADA YOSHIYUKI)

研究者番号：50404041

四日市 康博 (YOKKAICHI YASUHIRO)

九州大学・大学院人文科学研究院・専門研究員

研究者番号：40404048

(3)連携研究者

()

研究者番号：